

(様式3 - 2)

都道府県名	京都府	番号	26
教育委員会担当者名	大島 浩樹		

学 校 名：京都府立洛西高等学校
校 長 名：増田耕造
所 在 地：京都市西京区大原野西境谷町1
 丁目12-1.2
電 話 番 号：075-332-0555
研 究 担 当 者：教諭 正田隆司

1 学校の概要

(1) 学校の特徴

各学年普通科第 類(学力充実クラス)8クラス・第 類(学力伸長クラス)2クラスが設置されている。生徒の95%以上が上級学校への進学を希望している。

本年度より週32時間の時程を実施し、教科科目の学習の充実を図るとともに、教育課程にコース制を設け生徒一人ひとりの進路希望の実現に力を入れている。総合的な学習の時間においては、「地球と人間」をテーマに教科横断的な学習を実施している。また、生徒の自己認識を深め、地域の信頼をより一層深めるべく、地域や関連の諸機関との交流を積極的におこなっている。

(2) 学校概要

課程 学科	第1学年		第2学年	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制 普通科	397	10	400	10
	第3学年		計	
	生徒数	学級数	生徒数	学級数
	380	10	1177	30

(3) 学校の学習意欲・学力向上に関するこれまでの取組

- ア 3年間の進路指導計画に基づく系統的な進路指導
- イ 新学習指導要領に基づく週32単位の教育課程編制
- ウ 週5日制のもとでの教科科目の実質授業時数の確保
- エ 習熟度、少人数授業の実施
- オ 補習事業等
 - (ア)全学年対象の平常及び長期休業中の補習実施
 - (イ)1年生対象学習合宿、2年生対象夏期集中学習の実施
- カ 全員受験の各種実力テストの実施
- キ 公開授業週間の実施
- ク 学年別学力実態分析会議の実施

(4) 教育課題

- ア あるべき将来像に基づく進路希望の実現
- イ 学習習慣の確立と学習意欲の向上
- ウ 教科科目の学力向上

2 研究の概要

(1) 研究主題

学校と生徒の実態を踏まえた上で、学力の向上、学習意欲の向上に取り組み、指導内容、指導方法、指導体制、評価についての実践研究を行う。

(2) 研究のねらい

入学時の生徒の学力実態を正確に把握したうえで、生徒一人ひとりの進路希望の実現に必要な確かな学力を充実させる。特に国語・数学・英語を中心に、具体的な目標を設定したうえで、進路実現に必要な学力の養成をねらいとする。

その際、特に以下の観点に留意する。

- ア 生徒の実態に応じて基礎的な学力の充実や、より高度な知識技能の修得など、個に応じた指導を行う。
- イ 学校での学習活動を中心にして、適切な課題に基づく家庭学習の充実を図る。
- ウ 推進体制を確立し、学校全体が「学力向上」の実践をおこなう。
- エ 教職員の「学力向上」への意識改革をすすめ、授業改善を進める中で、教師の指導力を高める。
- オ 外部機関、外部の人材の活用を図る。

(3) 研究組織

教育推進部を主管分掌とする学力向上会議を設置。教頭及び教育推進部、教務部、進路指導部、生徒指導部、学年部、国語科、数学科、英語科より各1名の代表で構成。

(4) 3年間の計画

平成15年度

- ア 生徒の学力実態把握(入学直後の診断テスト、各種実力テストの教科別検討会、全体検討会の実施)及び実態把握に基づく課題の明確化と対応
- イ 教科・分掌と密接な連携を有する推進会議の設置
- ウ 授業改善にむけて、国語・数学・英語を中心とした各教科の公開・研究授業の実施及び授業分析・評価を観点とした研究協議の実施
- エ 学校での学習を核とした家庭学習の充実を図る(各教科において週末課題・週始確認テストの実施)
- オ 生徒の学習目標の明確化を図る
- カ 生徒の自己認識と進路希望の意識を高める(総合的な学習の時間「環境基礎」と各教科学習との連携、実社会で活躍する人材の活用)

平成16年度

(第1年次のイ・ウ・エ・オは継続して実施)

- ア 生徒の学力実態把握及び学習実態把握に基づく一人ひとりの生徒の進路意識の育成指導
- イ 効果的な習熟度別授業の実施
- ウ 各教科科目のシラバスの作成と生徒への提示
- エ 各教科レベルでの地元中学校との連携

平成17年度

(第1年次のイ・ウ・オ、第2年次のイ・ウ・エは継続して実施)

- ア 生徒の学力実態把握に基づく適切かつ具体的な進路指導
- イ 週単位での授業の進度、学習活動、到達目標の明確化と生徒への提示
- ウ 3年間の研究の成果をまとめ、その成果を18年度以降の教育活動に生かす

3 本年度の取組研究の概要

(1) 研究の実際

ア 学力・学習実態の把握と家庭学習の充実

1学期に生徒の学習・学力実態調査をおこない、本校の現状では家庭学習の充実が最重要・緊急の課題であると考え、関係教科・分掌との連携のもと、生徒に家庭学習の重要性を徹底し、習慣化を促すため、国語・数学・英語の各教科で家庭学習の習慣化を促す取組を、日常的・組織的に実施し、教科担任・HR担任の連携のもとで指導した。あわせて、学年部において定期考査を節にした「学習自己診断」の取組を実施した。また夏季休業中に学習合宿を行い、夏季休業中の学習や2学期以降の主体的な学習の意識付けを行った。

イ 学習目標の明確化と授業改善

各教科において、次年度生徒用のシラバス作成に向けて、従来の年間指導計画をもとに、生徒の学力・学習実態をふまえて、学習目標をより明確化した。また、各種実力テスト等の分析を踏まえた学年別の全体検討会を行い、学年の課題に対する全教員の共通認識を図った。また、教科別の検討会を行い、教科科目の課題、分野別の課題を明確にしたうえで、授業改善、学力向上に向けて教員の意識の改革を図った。

ウ 学習意欲向上の促進

生徒一人ひとりが自己を認識し、あるべき将来の姿を見据えて具体的な進路希望を持つことが学習意欲の向上につながると考え、3年間の系統的な進路学習と自己認識の前提となる他の認識を深める総合的な学習「環境基礎」を実施すると共に、実社会で活躍されている方の高校時代の経験を語っていただく進路啓発セミナー・及び本校卒業生約20名の協力のもとで各進路分野別の座談会を実施した。

【進路啓発セミナー】



【夏季学習合宿】



(2) 教材、資料等の作成状況

- ア 学習自己診断票
- イ 学習状況調査・連絡表
- ウ シラバス(第1学年)
- エ 進路自己点検ノート(仮称作成中)

4 研究に対する評価

(1) 研究の成果

- ア 「学習自己診断」の取組を通してのHR担任の指導の深まりや進路啓発セミナーの実施などにより、生徒の進路意識が向上し、多くの生徒がより高い具体的な進路目標を持つにいたった。【表1】
- イ 家庭学習を促す教科の取組や各種実力テストの分析に基づくHR担任の指導により、生徒の学習意欲を喚起した。
- ウ シラバスの作成や、教科内の各種実力テストの検討会を行うことにより、生徒の学力実態や各教科の課題や学習目標の明確化を再認識し、教科としての共通認識及び各教員の学力向上への意識が向上しつつある。
- エ 学年別の全体検討会を行うことにより、学年の学力実態と課題、及び他教科の学力実態と課題が全教員の共通認識となり、学力向上への教員の意識改革が図られつつある。

(2) 問題点及び今後の課題

- ア 京都府立高校実力テストにおける第1学年の成績の推移を見ると、上位層の学力向上は見られるものの、中下位層において低下が見られる。前年度の第1学年においても同様の傾向があり、特に、英語においてその傾向が強く表れている。数学においては、上中下位層ともに学力の向上を示しており、各教科における課題の分析と課題解決に対する取組はもちろんのこと教科間の実践の交流によって早急に取組を具体化する必要がある。また、各種実力テストや定期テストで明らかになっている各教科の分野別の弱点克服の取組を具体化する必要がある。
- イ 家庭での学習を充実させる取組を実践し、教科担任とHR担任との連携を密にすることはほぼ達成できたが、生徒の家庭学習の実態は未だ不十分である。

【グラフ1】

過去のデータを見ると、21期生・22期生の家庭学

習状況が2年生の5月に向上したにもかかわらず、翌2月に減少し、各種実力テストの結果も低下した。それに対して23期生（現2年生）は2年生になって家庭学習状況が向上を続け、各種実力テストの結果も良好である。現1年生の今後の学力向上を考える際に看過できないデータである。【グラフ2】

2年生での家庭学習を充実させるために、今後は保護者との日常的な連携をもより密にすると共に家庭学習を充実させるための授業、課題を各教科で具体化し実践する必要がある。また、課題を与えるだけでなく、家庭学習の方法を徹底するガイダンスを各教科で実施する必要がある。本年度は取組の実施が2学期になってしまったが来年度は年度当初から定期的実施する必要がある。

5 16年度以降の改善策

ア 家庭学習の充実について

(ア)本年度の取組を年度当初から実施すると共に保護者との連携を深める取組の実施。

(イ)各教科における家庭学習（基礎学習・発展学習）のガイダンスの実施。

(ウ)家庭学習を充実させる授業改善を目的とした研究授業の実施。

(エ)条件整備として部活動等と学習のけじめを明確にする学校体制の確立。

イ 講座単位での各教科学力の検討会の実施について
各教科の実力テスト等の分析をふまえた学力実態・学力向上への課題を学年単位ではなく、講座単位で明確化することによって、教員の学力向上への意識改革を徹底すると共に、授業を中心とした具体的な学力向上への実践につなげる。

ウ シラバスの改善、充実について

今年度作成したシラバスを1学年に配布した上で、授業での活用を図り、生徒の意見をも取り入れて日常の学習の指針となるよう改善する。また、1年間の教科指導の中で、1時間の授業の位置づけを明確にし、教員の授業に対する意識改革を図る

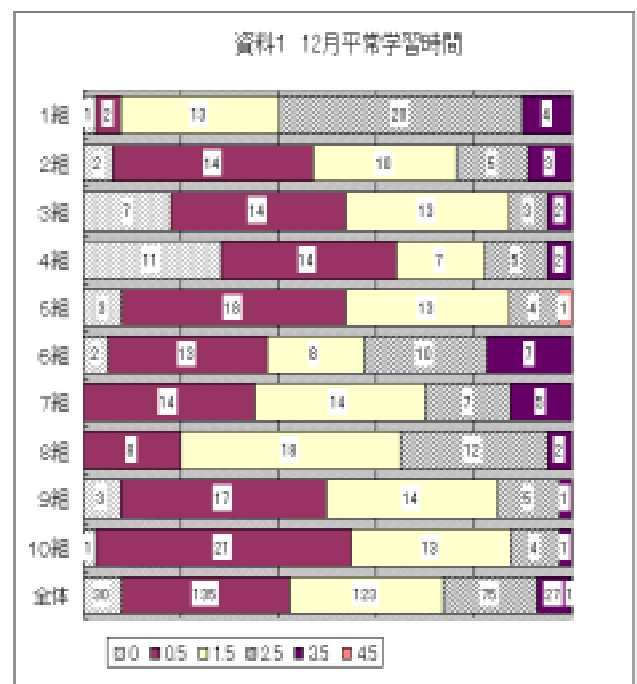
エ 学習意欲の向上について

生徒の学習意欲の向上のために欠かせない具体的な進路目標設定を促すため、系統的な進路学習に加えて生徒にとって身近に感じられる年齢層の社会人との交流の場を適切な時期に数多く設けるなど、進路啓発セミナーを継続発展させる必要がある。

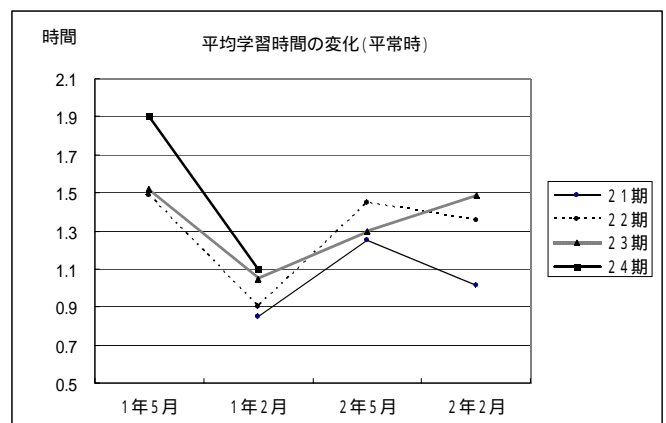
【表1】

	24期	5月	24期	2月
国公立四大	125	32%	140	36%
私立四大	72	18%	87	23%
短大	14	4%	15	4%
専門	52	13%	53	14%
看護	13	3%	10	3%
就職	5	1%	9	2%
校種未定進学	93	24%	60	16%
未定	17	4%	12	3%
計	391	100%	386	100%

【グラフ1】



【グラフ2】



添付資料

1. 教育課程
2. 作成中シラバス英語 (類)
3. その他の取組に係わるプリント